

事業報告

件名	第15回人づくり・地域づくりフォーラム 環境保全部会発表会		
日時	令和2年2月22日(土) 11:00~15:00		
場所	山口県セミナーパーク 研修室203	参加者数	48~35人
主催	(公財)山口県ひとづくり財団 生涯学習推進センター		
部会員	指導助言者：山口大学大学院 司 会：社会教育・文化財課 やまぐち総合教育支援センター	関根教授 新井社会教育主事 深田研究指導主事	
参加者	県内外の環境活動団体 等		

人づくり・地域づくりフォーラム環境保全部会の実践事例発表の概要を報告します。

1 発表会（発表の概要と主な質疑）

全国各地の4題の実践事例発表を聞いて、事例毎に意見交換を実施した。

(1) フードロスの削減と食に困る人がいない持続可能な社会を目指して～フードバンク活動の実践と課題～

(NPO法人フードバンク山口 理事長 今村主税氏)

○食べられるのに廃棄される「食品ロス」が問題となっており、一方で、様々な理由で食の支援が必要な人がいる。食べ物の「もったいない」を必要な方々に届けることで「ありがとう」に変えるフードバンク山口のこれまでの歩みと実践についての紹介と、活動における課題や今後の方向性などについて発表があった。

- ・2014年に下関市でスタートしたこの活動は、現在、山口、萩、防府、周南、宇部の6カ所に、活動拠点を設置するなど、取り組みが広がった
- ・表示やパッケージの不備や賞味期限の近い食品など、食品事業者から提供を受けた食品や、スーパー等に設置したフードバンクポストで県民から提供を受けた食品を、子ども食堂など、必要とされる団体等に提供
- ・もったいないだけでなく、この活動により、食品の生産から、加工、流通などの過程での資源やエネルギーなどを無駄にすることなく活用することができる
- ・家庭での食品ロスの削減には、消費者の意識改革が必要であるため、地域の祭りやレノファ山口の試合会場等で、家庭で食べない食品を寄付してもらう「フードドライブ」の取組も進めている
- ・将来的には、食品ロス削減が進み、フードバンクの取組が必要なくなった時に、食品の提供が必要な人への支援をどうするかを考えなくてはならない

・フードバンクに食品を提供している食品企業も、食品の提供だけでなく、どのようにすれば自社の食品ロスが削減できるか、取り組む必要がある

Q自分自身は、家庭での食品ロス削減に努めているが、食品の陳列方法の工夫や、恵方巻きを注文制にするなど、企業の取組を進める必要がある。もっと企業の意識改革を促すべき

A消費者の行動を促すため普及啓発しているが、企業にも関心を持ってもらうように取組を進めたい

Q支援が必要な家庭に提供する「子ども宅食便事業」では、どのようにして食品を提供しているのか

A直接家庭等に提供するのではなく、民生委員やソーシャルワーカーを通じて提供しており、栄養補助食品で栄養が改善して学校に行けるようになったとの報告もある

Qイベント会場で、家庭からの食品を集める「フードドライブ」では、通常はイベント会場に食品を持って行きにくいのが、どのように告知しているのか

A地元でのレノファの試合は、1回/2週あり、試合会場でのチラシの配付や、レノファのHPなど、またイベントでは、主催者の開催案内チラシやSNSを活用

Q取組の課題はなにか

A取組を進める中で、特定の人に負担がかからないようにいかに仕事を分散するかが課題と考えている。周南地域では、企業の積極的な協力を得ており、いろいろな人を巻き込んで、資金面も含め、持続可能な形で取組を進めたい

《指導助言者》

○発表では持続していくことの難しさはあまり感じなかったが、活動の継続には「楽しさ」が必要と考えている。活動の継続については、どのように思っているか

Aこの活動自体はどこかの時点で終わらせたいと考えている。持続可能な社会を見据える中で、フードバンクだけで良いのか、食品ロスの削減が進んだ時にどうすればよいのか、複数の制度を作る必要があるのでは、などを考えている

○本来は行政にお願いすべき食品ロスの削減と食料支援の問題に、企業などを巻き込んで取り組んでいる素晴らしい活動である

(2) くるちと三線で綴る～この島の謡（うた）と文化と未来の話～

(くるちの杜100年プロジェクト in 読谷 筆頭賛同員 平田太一氏)

○沖縄文化の象徴「三線」の棹の材料である黒木（くるち）は、現在、沖縄県でほとんど採取できない。生育に100年以上かかる黒木を植樹し、100年かけて次の世代に「三線文化」を継承していく取組について発表があった。最後に、発表者が、横笛の演奏を披露した。

- ・黒木（くるち）は、琉球の黒檀と言われる堅い木で、三線の棹の材料として使用できるようになるまで、100年以上成長する必要がある。第二次世界大戦で焦土となり、黒木も失われた沖縄では、現在、沖縄には樹齢70年程の木しか無く、輸入された黒木で三線を作っている状況
- ・民間人であった発表者が沖縄県の文化観光スポーツ部長を務めていた2012年、三線を奏でながら「島唄」を歌う音楽家宮沢和史氏から「黒木を植えたい」という話を聞いたことがきっかけで、賛同者が集まり、プロジェクトが立ち上がった
- ・すでに2008年に地元読谷村で「くるちの杜構想」が始まっており、2500本植樹されていたが、3年間の補助事業終了後は、手入れされず雑草まみれになっていた
- ・宮沢氏を名誉会長に据え、地元読谷村長を会長にして、月1回の草刈りと、年1回の植樹祭、2年に1回の音楽祭の3つの活動を進めている
- ・さらに、この取組を県内に広げ、次の世代につなげるため、県内の小・中・高等学校や大学等に出向き、講座等を開催している
- ・こうした中、2018年に、三線の材料を将来地元で確保することを条件に沖縄の三線が国の伝統工芸品の指定をうけることが決まった
- ・課題である事務局の強化を図るとともに、県全体に広げる取組を進めており、宮古島等で植樹活動が始まるなど、点の活動から面としての展開が進みつつある

Q素晴らしい取組で、感じるものが残る。寄付などは個人でも可能か。また、カードや電力会社のポイントなどを活用できる仕組みを検討されたい

A琉球銀行や郵便局で受付しており、助言に感謝する。運営がうまく行くように取り組みたい

Q草刈りが必要と言うことは、黒木は背が高くないのか

A植樹して8年間は草刈りが必要であるが、それ以後は、木が高くなり、草刈りは必要なくなる。木の幹の中心部の黒いところを材料とし、高さ8メートルの木から三線4本分の材料が確保できる

Q「文化はDNA」である。三線教室などを開いて、文化を子ども達に伝えていく必要がある

A三線の流派が3～4あるが、流派の垣根を越えて、高齢者が文化センター等で毎週土曜日200名程度の子どものに教えている。高齢者も出番がある

《指導助言者》

○コミュニティがしっかりしており、その中で育てられた人は、つらいことにも楽しいことにも参加する。我々の方が、発表者にコミュニティの育て方を学びたい

A中心者の心意気が重要。新しいことを始めると批判する人はたくさんいるが、中心にいる人は明るくなければならない。中心にいる人が楽しい人だと続く。食べ物のふるまいや、物品の提供など、わくわくするような取組が必要

○環境にいいことをしたい人は多いが、楽しいことの見つけ方が難しい。

A地域興しには、素材が大事。「島唄」の宮沢さんのネームバリューが大きく、人を集める必要がなかった。また、「草刈り」をやったあとの達成感は次に繋がる

○中心となる人の心意気、中心が楽しく、明るくやろうとすると、人はついてくる。身の回りで使えるものを探すことも必要だということ

(3) 町民みんなで築いたごみゼロ・ブランド～徳島県上勝町の挑戦～

(NPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー 理事 藤井園苗氏)

○人口約1500人の四国で最も小さな町、徳島県上勝町は、日本の自治体で初めて「ごみゼロ」を宣言し、家庭ごみの45分別など、独自に取組によるごみの削減について発表があった。

- ・2020年までに、焼却・埋立ごみをゼロにするゼロウエストを宣言し、ごみだけでなく、無駄や浪費の削減も目指した
- ・上勝町は、山間地にあり、元々ごみ収集車はなく、燃えないゴミは町民が集積場所に持参し、生ごみは畑等に埋却していた
- ・ごみは「燃える物／燃えない物」ではなく、「リサイクルできる物／できない物」に区分する考え方にすると、ほとんどリサイクルでき、リサイクルできる物の中には、有価で引き取られる物もあり、かなりの額の町の収入になった
- ・きちっと分別するとポイントがたまる「ちりつもポイントキャンペーン」や不要品交換の場「くるくるショップ」など、個人にとってメリットとなるものもある
- ・行政だけでなく、町民全員、企業も一緒の取組は、海外からも評価を受けておりダボス会議に、NPO理事長が共同議長として招かれた

Q県内では、10程度の分別の自治体が多いが、45分別の周知方法は

Aガイドブックを作って各戸に配布

Q小さな町だからできているのか、人口20万人程度の小規模都市でも実施可能か

A人口が少ない町でモデル的と思われがちであるが、世界的に見れば大都市の方が成功している(キャンベラ、サンフランシスコ等リサイクル率80%超)大都市で収集車をやめることはできないが、分別による資源の売り上げが大きくなる

Q自分の住んでいる町の市町や担当課に「弟子入りしなさい」と話したい

A「焼却ありき」の時代ではない

Qバイオマスの取組は

A上勝町では、選定枝なども山にして堆肥化しており、他の町ではメタンガス発電に取り組むところもある。異物混入防止対策が課題

Q運営経費はどのように捻出しているのか

A町からごみステーションの管理費をいただき、シルバー人材センターの運営で人件費を確保しており、他の活動はボランティア

《指導助言者》

○ごみを集めてバイオガス発電する自治体もあるが、分別の意味、メリットを行政も個人も理解する必要がある。行政がやるべきこととも考えられるが、活動としてとらえた場合、始めた時のキーパーソンはだれか

A始めは行政の仕事であった。平成9年までは、野焼きばかりだったので、町が県から指導を受け、焼却炉に頼るのをやめて、できるだけ燃やさないこととした。

行政だけではできないので、NPOと町の協働とした

○NPOと行政が連携し、成果をあげている活動である

(4) 芸術高校生による消えた天然記念物「葡萄櫨の原木」の再発見と保護

(学校法人りら創造芸術学園りら創造芸術高等学校 教頭 鞍雄介氏)

○高等学校における地域を探究する授業「地域デザイン」をきっかけに、「枯死した」とされる県の天然記念物「葡萄櫨」を発見し、生徒達が大学、県等と連携して、天然記念物への再登録を目指す取組について発表があった。

- ・本来は、中心的に取り組んだ高校3年の女子生徒2人が発表する予定であったが、難しいことから、高校生が書いた台詞を教頭(専門数学)が読むこととなった
- ・櫨(はぜ)の実から作られる木蠟(ろう)は、ロウソクの原料などになる。紀美野町では、原木から接ぎ木された葡萄櫨の木の実を収穫している
- ・町史では、「原木は枯死して、跡形もない」とされているが、高校で行ったフィールドワークで、地元民から「原木はある」との証言を得て、文献調査をした
- ・文献の原木の写真と照合した結果、葡萄櫨の原木が存在していることを確認した
- ・大学や、県の機関等と連携して樹齢調査やDNA検査等を行い、今年1月に天然記念物に再指定された

Q今回発見された原木は、接ぎ木として使用するのか、それとも養生するのか

Aどのようにするかは、今後関係機関等と協議するが、天然記念物に再指定されたので、実を取るには県知事の許可が必要となる

Q数学の教諭であったことが、子ども達の疑問や答えを導くことに働いたのか

A当校は、歌劇団等に進学する芸術の学校であり、数学という考える学問と、社会性のある芸術的な目線がいい方向に働いたと思う

Q以前、テレビでこの発見をドラマ風に紹介するのを見た。高校生が3年間の目標を立てて、取り組んだのか

A気持ち強い子ども達で、目の前にあることをしっかりと、真剣に取り組んでいた

《指導助言者》

○教員は異動もあるが、先生のいる間の活動や先生の思い、また、市民の目から見た学校とのつきあいなど、どうか

A 創立14年目の私立高校で教員の異動はないため、教員にとっても時間軸は村人に近く、無理のない取組ができていると思う。一部の生徒には、ここにIターンして、コミュニティ活動を進めて欲しい

○フォーラムの指導助言は3回目であるが、今回はバラバラのテーマで、どうなるかと思った。行政と市民の協働や学校と地域の取組など、結果的にはいい発表を選んでもらったと思う

2 まとめ

自然環境の保全から、食品ロスやごみ問題など、バラエティに富んだ発表で、参加者も様々な観点から意見交換することができ、参加者にとって、今後の取組の参考となる有意義な発表会であった。

